

武田泰淳全集

第十八卷

武田泰淳全集

第十八卷

筑摩書房

武田泰淳全集 第十八卷

昭和五十四年七月三十日 増補版第一刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九一

電話 東京(割)七六五二(営業)
東京(割)六七一一(編集)

振替 東京 六一四一一三
印刷 株式会社 三松堂
製本 和田製本工業株式会社

第十八巻 目 次

目まいのする散歩……………	3
上海の蟹……………	105
月明、笛と風がきこえる……………	205
まぼろしの百日草……………	235
少女と蛇娘……………	251
文学と仏教……………	267
勇氣あることば……………	277
宗教は統一できるか……………	278
友は離れているもの……………	280
戦争と私……………	282
わが心の風土……………	284

比叡山紀行	286
大拙先生の問答	302
法隆寺展を見て	308
アイヌの神と修道院の神	310
出羽三山	326
男性と女性と	343
京都の寺々	344
最澄	361
現代は罰せられている	370
「往生要集」の虫	379
誤解の効用	384
私にとって宗教とは何か	395
私の中の地獄	401
私の病状	431

椎名麟三氏の死のあとに	434
大江健三郎著『洪水はわが魂に及び』	440
『快楽』の頃	441
阿部昭著『千年』	443
川は流れて	444
中村真一郎著『この百年の小説』	451
文学と私	452
小松真一著『虜人日記』	460
ペンギン記	460
野の花のごとく	462
大きな坊ちゃん	466
魯迅先生と私	469
社会主義的指導者S氏と仏教者B氏との対話	470
「中国文学」と「近代文学」の不思議な交流	480

三島由紀夫のこと.....	491
---------------	-----

補遺

清末の諷刺文学について.....	507
鉄拐の顔.....	517
中国国民党史など.....	519
上海化.....	521
朱舜水の庭.....	522
中国の武士道.....	528
司馬遷の精神.....	530
宋江の殺人.....	536
私の机の上.....	538
なまけ者.....	538
蕭軍『愛すればこそ』『妻なき男』解題.....	540

『現代支那女流作家集』 解題 541

霞客 542

解 說 松本健一 563

解 題 577

小

説

12

目まいのする散歩

目まいのする散歩

六月の午前七時、久しぶりの好天氣に誘われて、山小屋を出る。医師に禁じられた酒をのむと、ついふらふらと無理がしたくなる。外出する必要は全くないのに、庭の坂を上りつめて、門の外へ出た。多少の努力感はあったが、警戒していためまいの現象は起らない。自動車道路まで行ってみようと歩きます。まだ大丈夫である。自動車道路は坂道になっているので、スピードを出した車がくると危険である。横断すると上り道になり、その先に石山がある。石山まで行く途中は舗装されていないで、雨に洗い流された石がごろごろしている。そこまで行きつけば、西湖の村々が樹海の遙か彼方に見渡せる。石山の向い側は西洋人の別荘であるが、人の気配はない。西洋人が一家できているさ

いは、目はしのぎく西洋人の子供が顔を出して、石山で眺望を楽しんでいる私を面白がるか、それとも怪しむかして様子をうかがいに近よってくるので、気が静まらない。石山というのは、頑丈な岩盤をダイナマイトで爆破したあとであり、大きな岩がわれて積み重なっていて、異様な風景である。その一段低い前側がブルドーザーでならされていて、樹木の生い茂った沢に面している。そこは、どういものか草が生え茂らないで、溶岩の台地をいつもむきだししている。遠くの低地からふき上げる風が心地よい上に、特別上等な場所と思われる爽快な気持ちになる。いままでやったことにはないが、座禅の真似をして坐りこんだ。座禅に対しては、わざとらしくて一種の抵抗を感じたが、誰もみていないことだし「自分は座禅をしているわけではない」という心づもりもあつたりして、自然にあぐらを組んだ。二、三度尻の下に加減をみてから、じっとしていると、足を投げだしたり、揃えたりして普通に坐っているよりも具合が

いいように思われた。富士山は、今上ってきた坂道の正面に頭をのぞかせているはずだった。坐っている場所からは、全く見えないはずだし、第一、富士山には背をむけて坐っている。やがて、立ち上るとめまいがきた。「やっぱり思ったとおりだ。そんなにうまくいくはずがない」と考えながら（考えるといつては、どうも意味がはっきりしすぎていて、本当は、もっとほんやりした感じだが）しやがみこむ。まだ体が不安定で、揺れ方がひどいので、そのまま、地べたに仰向けに寝てみた。凸凹した地べたは寝心地がいとはいえないし、自分の恰好が適当か否かも、よく定めがたいが、他人に迷惑をかけるわけではなし、その瞬間の自分にはふさわしいやり方だと思った。目をつぶっている、あたりは暗くなつたが、別にひどい状態がきたというわけではない。あんまりいいさまではないと感じて立ち上ろうとしたが、やはり駄目だった。鳥の啼き声は、あいかわらずにいる。陽もよくあたっている。少し待っていれば、やがて元通りになる、という自信があるので静かにしていた。

『中央公論』の新人賞の選者にえらばれたのは、伊藤整、三島由紀夫、それに私の三人だった。その二人は死んでしまったが、一人はガンを患つての病死だし、一人は割腹自殺だった。一人はひっそりと冷静に（と外部には想像され

たが）死を迎え、一人はその自殺した日がいつまでも忘れられないほど、よく晴れた十一月に、一世を驚愕させて、はなばなしく死んでいった。私はどんな死に方がいいだろうか、と冗談めかして話題にしたとき、二人とはちがつた死に方をすると思へば、殺される、刺殺される、処刑される、あるいは誰にもわからぬやり方で抹殺される死に方がいいだろうとしやべつたことがあった。理くつはその通りだが、殺されるチャンスなど、私を訪れるはずもなかった。だが、今、何の苦痛もなく、ただ寝そべっているだけの自分を発見したとき「恍惚死」ということが思い浮んだ。「恍惚死」といへば聞えはいいが、ボケて死ぬことである。そうなれば、自分にとっては大へん楽で、じたばたしないでもすむことである。しかし、なんぼなんでも、私のような人間が、そのような安楽な死を遂げられようとは信じていなかった。深沢七郎氏が「武田さんはきつと死ぬときには、あわてず騒がず死ぬでしような」と真剣に質問したとき「いや、とんでもない。僕は必ずじたばたして死ぬにきまつているよ」と答えたことがあった。

こじゆけいか、きじか、大きな羽音をさせて舞い上つてから、すぐ舞い下りて地面を歩く鳥の足音が聞えた。自分の病状を他人に説明するよい手がかりができたという判断がわいたのだから、つまり、自分の病氣とか、死とかを、自

分で演出してみたい気持が多少あったのかもしれない。私は演出とか演技とかは、苦手なタチで、その点は、とおく三島氏には及ばなかった。それ故、意志や能力なしに、演出や演技に近づけるものなら、これに越したことはなかった。

三度めか、四度めに立ち上ったときに、めまいが消えたので、坂道をひき返そうとして、十歩ばかり歩くと、まためまいがきた。出来るだけ、ゆっくりと右に左に傾きながら歩いた。そして、また、しゃがみこんだ。今度は、ねころんだりしないで、どうやら保つことが出来た。自動車道路を一気に横断して、両側に樹木が茂っているところで、また、しゃがみこんだ。ガードマンを二人乗せたジープが走ってきて、しゃがみこんでいる私のすぐそばで止まった。一人が降りてきて「別荘にいらっしゃったのですか」とたずねた。私は別荘客にはふさわしからぬ服装をしていた。上着もズボンもどちらかといえば、土地のじいさんのような姿だった。だからガードマンは特に「別荘にきていらっしゃるのですか」と怪しんだにちがいない。私は姿勢正しく立ち上って、「一四一号の武田です」と出来るだけ明確に答えてから、二人がジープに乗りこむまで、その様子を反対に確かめるように、取調べでもするように見つづけていた。そのうちの若い方には見覚えがあった。「富士」執筆に熱中している頃、熊が一頭、庭を横切ったことがあっ

た（もしかしたら、その頃から幻覚がはじまっていたのかもしれないが）。女房が管理所に報告に行くと「えッ、熊が」といって熊狩りに参加しなかったのは、そのガードマンだった。浅間山荘事件がテレビでうつしだされる頃で、このあたりの別荘地も警戒しているらしかったが、あのガードマンでは、一人の学生もつかまえられるまいと思ったりした。そのとき、また、めまいがしてきたが、それを見とがめられるのがいやなので、彼らが走り去るのを待ってから、また、しゃがみこんだ。家の門から、家にたどりつくまでの間に、まだ、二回ほど休まねばならなかった。坐りこんだまま、手の届く限り、あたりの草を、やたらにむしりとった。まだ、むしりとらねばならぬ草が沢山生えてしまっていて、庭が汚なくなることが気がかりだったからだ。「すべてのことは、たいがい無事にすむものだ」と、いつも通りの結論に達した。そして、散歩というものが、自分にとって、容易ならざる意味をもっているな、と悟った。

東京にいるとき、私の散歩する場所は、明治神宮、武道館、代々木公園の三つに定められている。その三ヶ所ともに駐車場があり、車が走ってはず、坂がない平地だからである。いろいろ思い合わせてみて「あらかじめ定められた

散歩」という名文句、あるいは題に思い及んだ。散歩という意味を広く解釈して、人間の運命は生れたときから、あらかじめ定められているというようにうけとれもするし、地球のどこかに住みついているからには、散歩とか旅とかいっても、あらかじめ空間的に決定されている行動範囲は、どうせ限定されているからだ。

上にあげた三つの場所は、どれも、私の現住所である赤坂から十分せいでゆける。車を降りて歩きだせば、そこが申し分のない散歩の範囲である。

明治神宮には外人旅行者が多い。私が明治神宮を散歩の一つにはじめて選んだ頃は、日本人の参拝者も、外国人の旅行者もまれであったのに、年毎にその数がふえだして、時間と週日によっては、外人の方が一般人よりも多い位である。彼らは多くは団体客で、無料休憩所のある参道の中ほどから、つながって現われてくる。外人女たちの服装は遠くからでも目立つし、去年は明るい赤色の衣服が多いとすれば、今年はグリーンのパステルカラーが多いといった按配で、もしかすると日本の流行の先端は彼女たちの服装から予定出来そうだった。外人専用の観光バスのコースの最初の地点に指定されているのかもしれない。最初の地点であるため、みな午前中の元気がまだ一杯なので、その声も楽しげに高く響くのだった。

私は守衛さんの立っている駐車場（それは、車をとめてはいかがかと思われるように、少しいかめしくて、いつもとめてある車の数もまばらなのであるが）に車の先を正しく前に向けて、ほかの車との間にすきまのないように、びっちりつけ、車を降りる。それは後向きにつっこんでとめて守衛さんに注意されたことがあるからである。車をとめるまでは一種の緊張があつて、守衛詰所に休んでいる守衛さんにも、かなり離れて立っている守衛さんにも、両方に気を使うからである。勿論、私は明治神宮に参拝するためにきたのだから、参拝者に限るといふ立札の指示に従っているわけである。しかし、やはり、参拝するだけではない、散歩という目的が別にあつて、それを楽しみたいという下心が働いている。鳥居をくぐるときの足の具合で、今日は調子がいいかわるいか予知することが出来る。すると足が進んで砂利道が踏みしめられ、高い樹木にはさまれた湿った道が、次々に後へ向つて移動してゆくようならば大丈夫である。神宮にきてめまいがしたことは一度もなかったが、帰途に鳥居をくぐるときに足が重くなることはあった。

たった一人で歩行訓練をしているらしい親父さんにあうこともあった。その人はいつも杖を手にして一歩一歩たしかめるようにして歩いていた。明らかに散歩を楽しむどこ

ろではなく、どの位歩けるようになったか、必死にためし
ている様子だった。本殿に行きつくまでに御苑に出入する
門が二つある。その門を二つ左側にみて、誰でもが立ち止
って見上げる大鳥居と、石でたたんだ道に入るところに立
っている中鳥居をくぐって、本殿に到着する。中鳥居の脇
に手を洗う清水があり、そこには、いつも必ず明治天皇と
昭憲皇太后の和歌が、右と左にはり出してある。いつみても
同じような調子の歌であるが、実は、日毎に別の歌とと
りかわっている。女房はそれを飽きもせずによみたがって
いるようだ。外人客は、歌のことなど、あまり注意せずに、
東洋の島国でなくてはお目にかかれぬ神社の「ワビ」
「サビ」を味わうらしい。私よりも、もっと年老いて、も
っと足許のふらついた外国婦人もいる。外国おじいさんに
たすけられて歩いてゆく外国おばあさんもいる。驚いたこ
とには、松葉杖を脇にはさんだ中年婦人もいて、鳥居のと
ころで一息いれて、そこから先へ進んだらいいか、それと
もここで団体の連中を待っていたらいいか、とまどってい
る人もいた。

いつか、有名な日本人俳優が、いかにもこれから散歩す
るぞという完全な散歩者の服装で、勢いこんで若い女の秘
書にたすけられながら、走るようにして歩いているのを見
た。勿論、私も女房と同行していて、手こそ握りはしない

が、形影相伴うようにして仲よさそうに歩いてゆく。守衛
さんは、ことによると、この二人組を記憶しているかもしれ
ない。あごに白ひげを生やした男が、目玉の大きいのん
きそうな女と組になって通うのだから、私たちが歩きはじ
めると、守衛詰所の守衛さんが本殿の方へいち早く「来
た」と電話で通知してあるような気がする。

私は、私たちの姿を認めたさいの本殿前の守衛さんの心
理状態を考えて、辛いような有りがたいような気持ちに襲わ
れる。明治天皇をよほど尊敬する人物の来訪と判断された
り、あるいは、特別の命令をもって守衛さんの勤務態度を
視察にくる人物と断定されるか、その一組の男女の何れか
が、白痴あるいは狂人であって、もう一人は看護人あるい
は保護者として付き添っているのだと疑われると疑うから
である。外人客のほとんど全部はカメラを所持している。
彼らの話す言葉を耳に入れて、私は何国人であるかと推量
する。どうも聞きがちがえかもしれないが、社会主義国から
きた人が多いようである。アメリカ人と社会主義国の人々
とは、どこことなく服装がちがう。東南アジアの人々も無
論いる。しゃべり方も東南アジアの人はちがっているが、ど
この国の人かは、なかなか判定しにくい。いつか、南米出
身の水兵らしい人が揃って参拝にきていて、彼らの歩き方
も、話し方もあまり潑刺としていて場ちがいのようにうけ

とられたことがあった。

私たちは、たしかに参拝にきたという証拠に、おさい錢をあげることにしている。女房が勝手につかみだして投げ入れたお金は最低十五円かそこらで、たまに小銭がないときには百円位はいれているだろうと私は判断している。十円玉と五円玉とどっちが私の分で、どっちが彼女の分かは、私にも彼女自身にも判明しない。社務所の巫女さんの服装をした少女から、お守り、お札の類を買うこともめつたにない。女房はくるたびに粉でできた菓子のお供物を買ってたべたがるが、お供物の類は売っていない。うちの娘は巫女さんのいでたちが気に入って、アルバイト学生としてつとめたいと願っているが、まだそのチャンスに恵まれない。さらに足をのばして裏手へぬけて、西洋式庭園の方へ向うか、それとも、ひき返して休憩所の食堂で何か食べるかは、私の体の調子次第である。観光バスの溜り場と無料休憩所は、隣合せになっていて、外人客もジュースやソフトクリームをそこで買い、面白がって食べる。食堂は一種の奉仕施設になっていて、ほかの店よりも売っている品が良心的に出来ている。冬など陽当りがよいので、鳩の群れあつまる広場の外のベンチに腰を下すこともあり、中に入って陽当りのよい席を占め、ゆっくり時間をつぶすこともある。食堂の椅子をもっと陽当りのよい硝子ばりのドア

の外に持ち出して腰を下すこともある。それは二、三回つづけると、係員に「椅子を外へ持ち出さないで下さい」と注意されたのでやめにして、階段の一番上に腰かけて陽なたぼっこをすることにした。

西洋式庭園で遊ぼうとするときは、芝生の間のコンクリート道をうしろむきになって歩いて、足腰をならし、パランスをとる練習をする。逆方向に正面をむいたまま歩くということとは、やってみると面白いものである。身体障害者の児童たちが一生けんめい練習していることもある。若い男や女の先生、児童の身の上を気づかう母親や姉さんが注意深くみまもっているなかで、児童たちは健気に自分の手足を自由にふり動かそうとしてもがいている。それは決して私のように「恍惚」とか「ボンヤリ」とかいふあいまいなものではない。なりふりかまわずという必死の勇氣をふりしぼっている有様に、こちらにも勇氣がわき上ってくる。それは勇氣といったほどのものではなく、半恍惚の、のったりした時間の流れの上に、泡の如く浮んで消え去った。わりあいによく歩く子は、一番先に立って歩き通してから、楽しげに満足したように休んでいる。親や先生も、それではと一息つく。重症の子はすぐ転ぶので、なかなか歩けない。励ましの声が高まると、よけい焦って足がからまる子供もいた。裸の子供たちを、秋や冬の陽ざしの下

で遊ばせている母親もいる。身体障害児とはちがつて、普通の子供にすぎないが、丸裸のままということは、やはり少し奇妙である。

「大へんだな。よくも我慢しているな」と同情はしたけれども、私は彼らのようにならなかつた。半恍惚の文士という現在の境遇が好きというわけはないけれども、彼らの境遇にくらべれば、私にはふさわしいし、どうしても死ぬまで彼らと同じ障害におちいりたくなかつた。

みすばらしい服装をした老夫婦をよくみかけた。セーターやスカートも色あせていて、老婆の方のつかけている下駄の鼻緒は手製で編んだものらしかった。必ず袋に鳩の餌を入れてきて、その夫婦の周囲には、いつも鳩が群がっていた。鳩はいくらでも、遠くから集ってきて、まるで老夫婦を襲撃するかのようだった。おそらく老夫婦は、その陽当りのよい芝生とは、およそ違つた、暗い湿っぽい部屋に住んでいて、そこへきてからやつと解放されたような気持ちになるにちがひなかつた。鳩に餌をやるのが、唯一の残された自由であり、救いであるにちがひなかつた。西洋庭園は、小川をはさんで南と北、両側へ向つてゆるやかにせり上る芝生をもつていて、上りつめるといかにも頑丈な石造りの記念館の建物が建っている。その前のコンクリート造りのベンチでしばらく時を過すのがならわしとなつて

いる。そこからなだらかな芝生の傾斜を見下すと、若い男がこねくりまわすようにしてねそべっているのが眼についた。たいがい女の方が上からのしかかるようにして、男の顔をのぞきこみ、男の方はうるさがりもしないで無視したようにして両足を長々とのばしていた。私たちには、いくら酔払つたにしても、そんな真似は出来るはずはないが、別にいやらしいとも羨しいとも感じなかつた。先生に引率された画学生たちが、あまり授業らしくもなく、野外授業をうけながら歩いてゆく。オカリナを吹いている少女もいる。誰と待ち合わせる様子もなく吹いているオカリナは、ひよろひよろひよろひよろと、風にとぎれながら聞える。やけになつたように一人ぼっちの時間をつぶしているらしい大学生（あるいは予備校生）が顔の上に書物をひろげて眠っていることもある。あまり、あたり一面ひろびろとしていて静かなので、却つて「ああ、世はすべてこともなし」という感じは起きない。むしろ、静さにざわめいているような気がする。幼稚園か保育所の子供たちをつれてきた女先生の口にあてがった号令の笛がビッピと聞える。いくら笛が鳴つても、わがままな子供は勝手な方角に向つてつき進み、そして転がる。女先生の仕事は、時間が経つまで無事にすんでいればいいわけで、笛の音は、しばらくとまつては、また聞えはじめる。眼や耳のはたらきの届く